
魔王候補生 A

神去無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王候補生A

【Nコード】

N5439Z

【作者名】

神去無月

【あらすじ】

勇者が来なけりや毎日が退屈な魔界。そんな魔界で、危険を知らせる警鐘が突如鳴り響いた。それはつまり勇者が現れたということである。

しかし今現在、魔王様は部下の魔将たちを引き連れ慰安旅行中。うーん、勇者一行が来たときに重鎮不在では魔界の面子丸潰れ。というわけで、今から魔王の素質を持つ者を20人ほど募集してみる。それで新魔王を降臨させよう！

果たして魔王は誕生するのだろうか。そして、勇者登場までに間

に合うのだろうか。ていうか、現魔王が早く帰ってこいよ！

プロローグ

「……………」

少年は寝惚けたような口振りで、浮かんだ疑問を率直に呟きます。周囲は朽ち木と、ひび割れ不健康そうな土しかなくリアル荒野です。空を見上げればどんより灰色の曇天が。人間に例えるなら古代エジプトのミイラか引きこもり歴30年のヒツキーと言ったところでしょう。

「初めましてだな、魔王。ここは魔界だ」

少年の背後。仁王立ちで背中に翼を生やした少女が腕を組み、初対面なのにも拘わらず生意気にも上から口調で少年の疑問に応えます。

何様だよ。ちっぱいのくせに。少年は心の中でツツコミます。心は自由でいいですね。でも内心、可愛い女の子と出会って緊張しているようです。

さてさて、少女の胸の大きさは置いておき、気になるワードが出てきたではありませんか。

「魔王って僕？」

「正確には魔王候補だけだな」

「魔王、候補……」

魔王候補。少年はおうむ返しに呟きます。

つとと、なんだか思い出せないことがあるみたい。眉間に皺が寄

せられたと思いきや、情けなく八の字に眉尻が下がりました。

「……僕、俗に言う記憶喪失だと思う。さっきまで何してたか思い出せない……」

すると少女はけらけら笑いながら、詫びる素振りを一切見せることなく大胆な発言をしました。

「うん、私が消した。記憶消去なんて容易いな」

「うーわっ、この人なんて取り返しのつかないことしてくれちゃってんの？」

他人様の記憶を消すなんてどこの我が儘女だよ。親の顔がみてみたいね。少年は毒づきました。しかし声のボリュームが小さいことから、少年はヘタレ男子なのかもしれません。

まあ、そんな些細なことは少女には興味ありませんが。……多少、影響はありますけど。

「お前、名前は言えるか？」

「たてはし こめし楯橋木梨。……オイ、なんで名前は覚えてるんだよ」

「王道だからさ」

そんなドヤ顔をされても……、と少年改め木梨くんはリアクションに困ってしまいます。じゃあ、とりあえず笑いましょう。誤魔化すには笑顔が最適です。

「で、キミは？」

「私か？ 私は魔王候補生の指導係　小悪魔だ。悪魔子とでも呼んでくれ」

「悪魔子……」

「魔王選定試験日までよろしく頼むな、木梨」

嗚呼、なんとということでしょう。どうやら木梨くんは大変なことに巻き込まれてしまったようです。

魔王候補生に魔王選定試験。それと魔界。聞き慣れない単語がリレイン。これは現実？ それとも夢の中？ 木梨くんは偏頭痛に襲われてしまいました。

「頭いてえ……」

「それは一大事だな木梨。ならば任せておけ、私が木梨を運んでやる」

「ど、どこに……？」

嫌な予感がしてたまりません。この感覚は、授業でわからない問題に限って先生に当てられるパターンに酷似しています。日付で解答者を決める方法は廃止するべきだと思えます。

悪魔子さんはダークな雰囲気を含む漆黒の翼を左右に広げました。その大きさは人間の背丈を優に超しているではありませんか。これは木梨くんもびっくりです。

「作り物じゃないのか」

「当たり前だろう。私の飛行技術はトップクラスだ、そんじょそこらと同等と思われるのは心外だな」

フンと得意気に言ってから、悪魔子さんは木梨くんを抱き上げました。俗に言うお姫様抱っこというやつです。

「うわっ、ちょ、何すんだよ！ 恥ずかしいから、これ結構恥ずかしいから！」

腕をバタつかせて抵抗するものの、悪魔子さんには効きません。木梨くんをしっかりと抱き締めています。

悪魔子さんはやれやれ、と溜め息をつきました。お疲れのようですね。

「誰も見ていない。気にするほどでもないだろう」

「そっいつ問題じゃないんだけど……」

「その他諸々、詳しいことは魔王候補生寮に着いてから話そう。では行くとするか」

(女の子にお姫様抱っこされるなんて……。身体が密着してて色々やばい)

顔を背けた木梨くんが内心で呟きます。その頬や耳が赤いことを指摘するのは意地悪で野望というものでしょう。

「ふふ。あまり暴れてくれるなよ？ つまらない景色を堪能しながら向かうとしようじゃないか、木梨」

1回、2回と翼を羽ばたかせ灰色の背景へと飛び立つ悪魔子さん。お姫様抱っこされている木梨くんはちょっとビビってるみたいです。

「あ、悪魔子、1つ教えてもらっていいか？」

「5つくらいでもいいけどな」

「……じゃあ2つ。魔王になれなかったらどうなるんだ？ それと、もし魔王になったら」

まだ木梨くんが喋っている途中でしたが、悪魔子さんが急激に上昇したため木梨くんは舌を嚙んでしまいました。ああ痛そう。

悪魔子さんは余裕綽々といった表情で、涙目の木梨くんに言いました。

「良い質問だ」

「舌嚙んだ……。い、良い質問なのか？」

「まあな、しかしそれらの答えは寮に着いてからにしよう」

ニヤリと不敵に笑う悪魔子さん。この瞬間、木梨くんは既に堪らなく嫌な予感しかしないのでした。

「……もう少し低く飛んでくれないか？」

「ん？ 怖いかな？ そう言えば先ほどから妙に抱きついてくるとは思っていたけどな」

「それは怖いよ！ バサバサするたびに揺れて、いつ落ちるか冷や冷やしてるし怖いんだよ悪いか！」

「落としたりなどしない。私に任せておけ木梨」

「……悪魔子さん男前」

悪魔と名乗る少女に記憶を消去された楯橋木梨。どうやらこの少年、波乱に富んだ人生を送る羽目になりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5439z/>

魔王候補生A

2011年12月18日11時52分発行